１　研究主題

中学生の「読むこと」「書くこと」における
英語コミュニケーション能力に関する実態調査研究

＜内容の要約＞

本研究は，中学生の「読むこと」「書くこと」における英語コミュニケーション能力に関する実態や課題を明らかにしようとしたものである。その結果，生徒は，手紙や対話文は理解できるが，物語の要点を把握する力が不十分であること，自分のことについては自由に表現できても，読んだ内容を把握し，その要点を第三者に伝えることができるまでには至っていないことが分かった。その改善の方策として，語彙力を身に付け，英文の大まかな構造を理解させるための学習の機会を増やし，実践的なタスク活動を授業に取り入れることが必要であると考える。また，分析的評価法により，生徒の内容理解度や学習意欲を把握できた。分析的評価法は，生徒の習熟度に応じて段階的に指導する上で効果的である。

＜キーワード＞

(1)中学校英語　(2)「読むこと」「書くこと」　(3)コミュニケーション能力　(4)分析的評価法

２　主題設定の理由

平成10年に出された教育課程審議会答申では，国際化への対応をこれからの教育課題の一つに挙げている。さらに，平成14年度から実施される新しい学習指導要領（以下，学習指導要領）では，外国語が必修教科になり，国際社会で世界の人々と協調し，積極的に外国語でコミュニケーションを進めていくことができる資質や能力を養成することが，なお一層求められている。急速な国際化に対応するために，異文化間コミュニケーションの媒体としての英語の重要性は今後ますます高まっていくと考えられる。

国際化社会で求められているコミュニケーション能力とは，単に英語の文法や語彙などについての知識があることだけでなく，実際に情報や考えを授受することを目的として英語を運用することができる実践的コミュニケーション能力である。コミュニケーションの手段としては「聞くこと」「話すこと」の音声面が重視されがちであるが，コンピュータの普及等を考慮すれば，文字を媒介とした「読むこと」「書くこと」によるコミュニケーションも今後ますます重要になってくると思われる。例えば，必要な情報や書き手の意向などを読み取って理解したり，自分の考えを書いて表現したりして読み手と通じ合えるコミュニカティブ，インタラクティブな能力が求められる。また，生徒がインターネットで情報を検索したり，E-mailで相手と情報交換をしたりするなどの活動が今後は増えてくると考えられるため，「読むこと」「書くこと」における実践的コミュニケーション能力を育成するための指導方法の工夫・改善が求められる。

そこで，中学生の「読むこと」「書くこと」における英語コミュニケーション能力の到達状況を測定し，生徒の実態や課題を明確にし，生徒の実態に応じた学習指導方法改善のための資料としたいと考え，本研究主題を設定した。

３　研究の目標

(1)　中学生の「読むこと」「書くこと」における英語コミュニケーション能力に関する調査票を作成し，実

態調査を実施して，生徒の実態や課題を明らかにする。

(2)　「読むこと」「書くこと」における英語コミュニケーション能力について調査結果を分析し，学習指導方法改善の方策を探る。

4　研究の内容と方法

(1)　研究の内容

ア　調査票作成について，文献等による理論研究及び先行研究を行う。

イ　「英語コミュニケーション能力に関する調査票」を作成し，調査を実施する。

ウ　調査結果を分析し，考察する。

エ　調査結果の分析から，学習指導方法改善のための視点を明らかにする。

(2)　研究の方法

ア　学習指導要領外国語科の目標及び先行研究を踏まえ，「英語コミュニケーション能力に関する調査票」を作成するための理論的枠組に基づき，調査票を作成する。

イ　県内の中学校を数校抽出し，英語コミュニケーション能力に関する調査を実施し，集計・分析する。

ウ　学習指導方法改善のための視点を探るために，高等学校での調査結果と比較する。

5　研究の実際

(1)　調査票作成の基本的な考え方

中学生のコミュニケーション能力を測定するためのテスト，すなわち，コミュニカティブ・テスト（以下，CT）の特色について，望月昭彦は，Savignon，Brown，Backman及びWeirの論をまとめ，図１のように示している。[(1)]

①　CTは，総合テストである。
②　CTは，直接テストである。
③　CTは，現実生活をタスクに取り入れている。
④　CTは，場面を設定している。
⑤　CTは，言語の機能を測定する。

図１　コミュニカティブ・テスト（CT）の特色

本研究では，Weirの「３部構成枠組」（A three-part framework）の理論に基づきCTを作成した。望月によれば，「３部構成枠組」とは，「テスト作成を，活動がなされる条件，測定すべき活動，評価基準の３つの視点からとらえ，授業，テスト，将来の実生活の場面での技能の関連を視野に入れた理論枠組」[(2)]を意味する。この理論に基づき，望月の論文[(1)]を参考にして，「読むこと」に関する調査票及び「書くこと」に関する調査票の「３部構成枠組」（表１）を作成した。

(2)　出題範囲

調査実施時点までに，各学校で共通に学習した範囲内とした。

(3)　問題の程度

学習指導要領に示されている目標及び内容を基準とした。

(4)　調査の実施

ア　実施期間	平成13年２月13日（火）～２月17日（土）
イ　調査対象校	県内の中学校12校
ウ　調査対象者	第２学年　674名
エ　調査時間	50分（調査後，「英語に関するアンケート調査」を５分間で実施）

表１　調査票作成の理論的枠組

<table>
<tr><td colspan="3"></td><td>「読むこと」</td><td>「書くこと」</td></tr>
<tr><td rowspan="7">活動がなされる条件</td><td colspan="2">目的</td><td>1　物語や説明文などのあらすじや大切な部分を読み取る。
2　伝言や手紙などから書き手の意向を理解し，適切に応じる。</td><td>1　文字や符号を識別し，語と語の区切りなどに注意をして正しく書く。
2　聞いたり読んだりしたことについてメモを取ったり，感想や意見などを書いたりする。
3　自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書く。
4　伝言や手紙などで読み手に自分の意向が正しく伝わるように書く。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">テキスト</td><td>種類</td><td>物語文，論説文，説明文，描写文，会話文</td><td>物語文，論説文，説明文，会話文</td></tr>
<tr><td>設定</td><td>1　テキストの書き直し（被験者が中学校２年生のために，文型や語彙を制限する必要がある場合）
2　被験者が興味を引かれ，文化的に偏りがない内容
3　被験者の知的程度に適切な内容</td><td>中学校２年生の２学期までに学習する文法事項・語彙</td></tr>
<tr><td>様式</td><td>絵や図表の使用</td><td>文字，絵，図表等の使用</td></tr>
<tr><td colspan="2">所要時間</td><td colspan="2">問題ごとに解答の目安となる時間の設定（「読む」問題と「書く」問題を合わせて50分）</td></tr>
<tr><td colspan="2">留意点</td><td>日本語による指示文の作成（テストの指示を明確にするため）</td><td>1　日本語による指示文の作成（テストの指示を明確にするため）
2　和英辞書の使用不可
3　約30語の作文作成（中学校卒業時に約50語程度の作文ができればよいと考え，中学校２年生の２学期の段階であることを考慮）</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="4">測定すべき活動</td><td colspan="2">予想される活動内容</td><td>1　80語程度の英文を読ませ，日本語で要点を書かせる。
2　英文の内容に合うように絵を並べさせる。
3　必要な情報が書き手に伝わるように返事を完成させる。</td><td>1　空欄に適する語を正確に書かせる。
2　対話文を読み，伝言メモを英語４文で書かせる。
3　トピックを与え，それについて自分の気持ちや考えが読み手に正しく伝わるように書かせる。
4　読み手に伝える内容を整理して，読み手に自分の意向が伝わるように，招待状を書かせる。</td></tr>
<tr><td colspan="2">信頼性</td><td colspan="2">評価者間信頼性と評価者内信頼性の考慮</td></tr>
<tr><td colspan="2">妥当性</td><td colspan="2">表面妥当性，内容妥当性，構成概念妥当性の考慮</td></tr>
<tr><td colspan="2">実用性</td><td colspan="2">テストの作成，実施，採点，分析及び考察の際，容易で実用的であること</td></tr>
<tr><td colspan="3">評価法</td><td>伝統的な評価法</td><td><u>分析的評価法</u>
タスクの種類に応じて観点を定め，観点（つづり・文法，内容，意欲）別に評価点を設定し，採点する評価方法
※伝統的な評価法も併用</td></tr>
</table>

(5) 調査票の作成

調査票の作成に当たっては，前述したCTの特色をもたせるために，音声，語，文など一つ一つについて個別の要素を測定する個別項目テストではなく，総合的なテストであることを念頭に置いた。その上で，学習指導要領に示されている言語活動やその取扱いを踏まえ，生徒が将来遭遇する実践的な場面での実践的な能力を測定することを意図して作成した。また，解答に時間を要する生徒のために，各大問の調査時間の目安を示すことによって，生徒がすべての問題に取り組めるよう配慮した。

本研究委員会では，平成12年度に調査票を作成し，研究協力校で予備調査を実施した。各質問項目が調査の目的である「英語の『読むこと』『書くこと』におけるコミュニケーション能力を測定すること」にふさわしいかどうかを判断するために，クロンバックの信頼性係数（以下，α係数）を求めた。一般にこの係数が0.80以上であれば問題に信頼性があると判断してよいとされるが，予備調査の段階で0.73だったため，問題の配列や課すべきタスク等を一部変更し，調査票を完成した（資料，p76〜77参照）。表２は調査票の概要である。

表２　問題構成表

領域	学習指導要領の指導事項	大問	小問	問題内容	配点(点)	時間(分)
読むこと	**伝言や手紙などから書き手の意向を理解し，適切に応じること**	1	1	手紙文を読み，手紙の内容について日本語で答える。	6	15
			2	手紙の内容に応じて必要な返事を英語で書く。	3	
	物語や説明文などのあらすじや大切な部分を読み取ること	2	1	短い物語文を読み，話の筋に合うように絵を並べ替える。	2	
			2	短い物語文を読み，登場人物の心情を読み取って日本語で答える。	4	
		3	1	対話文を読み，用件を日本語でまとめる。	3	15
書くこと	**聞いたり，読んだりしたことについてメモを取ったり，感想や意見などを書いたりすること**		2	対話文を読み，伝言のメモを英語４文で書く。	8	
	文字や符号を識別し，語と語の区切りなどに注意をして正しく書くこと	4		スピーチの原稿を読み，空欄に最も適する語を書く。	12	
	自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書くこと（高等学校との共通問題）	5		自分の好きな季節について，好きな理由や自分の考えが正しく伝わるように英語で書く。	11	20
	伝言や手紙などで読み手に自分の意向が正しく伝わるように書くこと	6		伝える内容を整理して，読み手に自分の意向が正しく伝わるように，招待状を書く。	12	

(6) 採点基準の作成

「書くこと」における従来の調査（テスト）では，「つづり・文法」についてのみ，又はそれにかなり重点を置いた採点や評価をしてきた傾向がある。そこで，本研究委員会での調査では，このような伝統的な評価法に加え，分析的評価法を導入し，生徒の英語力を段階的に評価することにした。このことにより，単語を正確につづれなかったり，単語を正しく並べて文にすることができない生徒でも，書こうとする意欲がどの程度あるのか，会話文や説明文等の内容をどの程度とらえているのかを，より的確に評価できるようになると考える。

また，調査票の採点に当たり，採点者間のずれを最小に抑えるために，採点基準（表３）を設定した。

表３　採点基準表

大問	小問・項目	採　点　基　準
1	問１	伝統的な評価を行う。（６点）　解答の内容が合っていれば正解とする。
	問２	伝統的な評価を行う。（３点）　各１点。
2	問１	伝統的な評価を行う。（２点）　完全正答。
	問２	伝統的な評価を行う。（４点） ４つの要素（ジョンが，２～３日たってもまだ，事務所を，探していると思ったから）が含まれること。次のような解答について部分点を与える。「また会ったから」や「同じ人にまた会えたから」は１点。「同じ人にまた会ったから」は２点。
3	問１	伝統的な評価を行う。（３点） ３つの要素（明日，サッカー，誘い）が含まれること。
	問２　内容	分析的評価を行う。（４点） １文ごとに採点する。４つの要素（サッカーのチケット，誘い，けんじも行く，明に今夜電話をする）が含まれていれば，それぞれ１点。
	問２　つづり・文法	分析的評価を行う。（４点） 内容に関する分析的評価で，得点した分についてのみ評価を行う。１文ごとに採点する。１つの文でミスがなければ１点。
4		伝統的な評価を行う。（12点） つづりにミスがあれば０点，③と⑥は大文字で始めてなくてもよい。
5（中・高共通問題）	意　欲	分析的評価を行う。（４点） （間違えてもよいから多くを書こうとしているかを評価） 文は書けなくても単語１語でも書いていれば１点。不完全な文でもよいから１文書いていたら２点。不完全な文でもよいから２文書いていたら３点。不完全な文でもよいから３文以上書いていたら４点。無答は０点。／I like ～ ／のパターンでの単なるSVOの羅列は２点。ただし，比較表現・前置詞句等を加えて工夫してあれば，それぞれを１文と見なし，２～４点とする。
	内　容	分析的評価を行う。（４点） 意欲に関する分析的評価で，得点した分についてのみ評価を行う。好きな季節を書いてあれば１点。その理由が書いてあれば１点。自分の気持ちや考えが書いてあれば１点。自分の気持ちや考えが創造的に書いてあれば更に１点。／I like ～ ／のパターンでの羅列は２点まで。（例）／I like summer.　I like summer vacation.／
	つづり・文法	分析的評価を行う。（３点） 内容に関する分析的評価で，得点した分についてのみ評価を行う。完全な文（つづりミス・文法ミスなし）が１文書いてあれば１点。完全な文２文書いてあれば２点。完全な文が３文以上書いてあれば３点。／I like ～／のパターンでの単なるSVOの羅列は１点。ただし，比較表現・前置詞句等が加わったり，／because／でつなげてあれば２点。
6	内　容	分析的評価を行う。（６点） つづりにミスがあってもよい。用件（すしパーティー）が書いてあれば１点。ただし，文（例／We have a sushi party.／）でなくても語句（例／Sushi Party／）だけでもよい。日付（５月４日）が書いてあれば１点。ただし，文でなく語句だけでもよい。時刻（午後５時）が書いてあれば１点。ただし，文でなく語句だけでもよい。／Afternoon 5／も可。場所（私の家）が書いてあれば１点。ただし，文でなく語句だけでもよい。「友達を誘ってもよい」ことが書いてあれば１点。ただし，文でなければならない。創造的な文を書いていれば更に１点。それが不完全な文でもよい。「創造的な文」とは／See you then.／や／I hope you can come.／等の結びの文，／I'd like to invite you a sushi party.／のように創造的に表現された文，／Do you like sushi?／等を指す。
	つづり・文法	分析的評価を行う。（６点） 内容に関する分析的評価で，得点した分についてのみ評価を行う。採点基準は上記「内容」と同じとする。ただし，つづりにミスがあった場合は０点。また，創造的な文については，完全な文（つづりミス・文法ミスなし）の場合，更に１点。

(7)　「英語に関するアンケート調査」の結果と考察

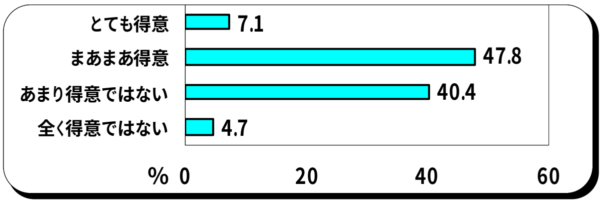


図２　問2（問1で「とても好き」「まあまあ好き」と回答した生徒）

表４は「英語に関するアンケート調査」の結果である。５つの質問のうち，問５の一部と問４を除いて，高校生にも同じ質問をし，その回答結果も併せて示した。

中学校で「英語が好き」な生徒が約半数いるが，そのうちの約45%は「英語が不得意」だと回答していることが分かった（図２）。生徒の４人に１人が，英語の学習に興味・関心はあるが，英語力に自信がないと思っていることがうかがえる。中学校と高等学校を比較すると「英語が好き」な生徒は若干増えているものの，「英語が得意」だと回答した生徒は逆に約６％減少している。これは，高等学校での英語学習の難易度が高くなり，習得すべき単語数が増え，英語で書かれている内容を理解することが困難だと感じていることを示している。したがって，中学校の段階で学習する基本的な言語材料を十分に習得させることが，高等学校での英語学習を進める上で重要である。

また，問３，４の結果から，「書くこと」への関心が低いことが分かる。これは，問５の結果から，「単語が分からない」「英文の作り方が分からない」「自分の言いたい内容をうまく書いて表現できない」ことがその要因であると考えられ，これらのことを改善していく必要がある。中でも高等学校では「単語が分からない」と回答した生徒が最も多く，語の習得が英語を理解したり表現したりする上で重要であることがうかがえる。高等学校で平成15年度から実施される新しい学習指導要領では，英語を履修する場合は「オーラル・コミュニケーションⅠ」又は「英語Ⅰ」が必履修科目となり，いずれの科目も中学校で習得すべき900語程度に加

表４　英語に関するアンケート調査　　(単位：%)

設問及び選択肢	中学校 674名	高校 443名
問１　英語が好きですか。		
とても好き	9.5	7.3
まあまあ好き	38.3	43.1
あまり好きではない	33.7	36.1
全く好きではない	18.5	13.5
問２　英語が得意ですか。		
とても得意	3.7	1.4
まあまあ得意	25.4	21.5
あまり得意ではない	37.8	41.7
全く得意ではない	33.1	35.4
問３　英語の授業では，どのような活動が好きですか。（複数回答可）		
単語を先生やCD(テープ)の後について読む	24.2	14.1
教科書の本文を声を出して読む	19.4	14.1
先生（ALTも含む）の英語での話を聞く	31.9	32.5
先生と英語でコミュニケーションをする	15.9	11.1
身近な内容について友達と英語で話す	14.4	8.0
友達との英語でのインタビューゲーム	35.9	15.5
自分の考えている内容を英語で書く	13.5	10.7
教科書の本文の内容理解	28.9	27.5
教科書以外の英文の内容を読み取る	14.5	17.7
その他	10.4	8.4
問４　特に英語のどのような力を身に付けたいですか。		
話される英語を聞いて理解する力（聞く力）	37.1	
自分の考えや気持ちを話して相手に伝える力(話す力)	33.1	
書かれている英文の内容を読み取る力(読む力)	27.4	
自分の考えや気持ちを書いて相手に伝える力(書く力)	13.1	
その他	1.5	
問５　英語で書かれている手紙や文章を読んだり，自分の考えを英語で表現したりするときに，困るのはどのようなことですか。（複数回答可）		
単語が分からない	60.4	87.5
英文の作り方が分からない	72.0	69.5
辞書（和英・英和）の引き方が分からない	5.6	1.1
書かれている内容を読み取るのに時間がかかる	46.4	51.4
書かれている内容（考え）が理解できない	36.6	44.8
自分の伝えたい内容を表現するのに時間がかかる	46.9	48.0
自分の言いたい内容をうまく書いて表現できない	65.1	
自分が伝えたい内容が思い浮かばない	17.8	19.8
その他	1.2	1.2

え，更に400語程度の新語を扱う。これらの新語の中には，中学校で習得された語の同意語や反意語及び派生語も多く含まれており，中学校での習得がこれらの科目での新語の習得に大いに役立つはずである。

さらに，中学校で「読むこと」の領域で得点率が30%未満だった生徒の多く（約71%）が，英語の４つの領域（聞く・話す・読む・書く）のうち身に付けたいものとして，「聞く」力と「読む」力を選択した（図３）。この結果は「書くこと」の領域でも同様に得られた（図４）。つまり，英語が不得意な生徒は，英語の受容的な領域の能力の習得を望んでいると言える。アンケート調査の問１，２の回答結果と併せて考えれば，会話や手紙の交換等で外国人とのコミュニケーションを図る際に，「相手が何を伝えようとしているのかよく理解できないので，どう応答してよいのかわからない」と悩んでいる生徒が少なくないという実態が浮かび上がってくる。このような悩みや不安を自信に変えさせる必要がある。

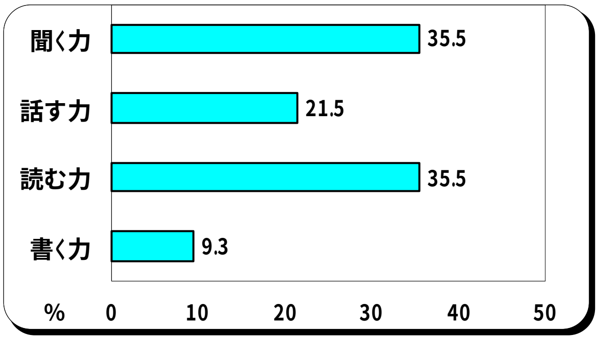


図３　問４（読む領域の得点率30%未満の生徒）

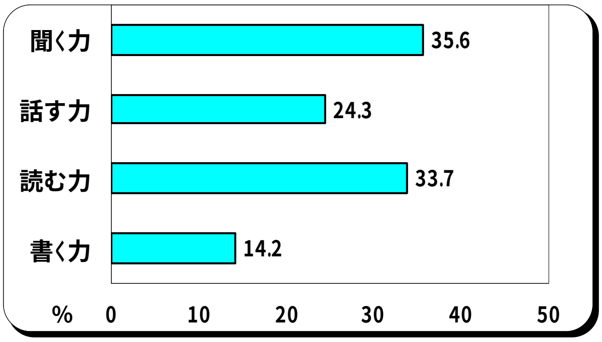


図４　問４（書く領域の得点率30%未満の生徒）

(8)　「英語コミュニケーション能力に関する調査」の結果と考察

ア　調査の結果

調査を実施し，表５～７のような結果が得られた。平均得点率の集計に際しては，調査対象者全員分の平均得点率だけでなく，「読むこと」「書くこと」の領域で，それぞれ得点率が70%以上の生徒，30%以上70%未満の生徒，30%未満の生徒の３つのグループにも分けて行った。これは，習熟度に応じた指導方法の視点をも探りたいというねらいのためである。

表５　英語コミュニケーション能力に関する調査の結果　　**674名**

	調査全体	読む領域		1	2	3 問1	書く領域		3 問2	4	5	6
配　点	**61**	**18**		**9**	**6**	**3**	**43**		**8**	**12**	**11**	**12**
標準偏差	**12.74**	**4.21**		**2.14**	**1.84**	**1.25**	**9.48**		**2.55**	**2.53**	**3.08**	**3.52**
相関係数	**1**	**0.86**		**0.75**	**0.65**	**0.67**	**0.97**		**0.78**	**0.78**	**0.78**	**0.81**
平均得点率	**42.4**	**55.7**		**75.8**	**23.9**	**59.2**	**37.4**		**28.8**	**34.4**	**51.9**	**32.8**
		読A群	**82.8**	**95.1**	**61.9**	**87.6**	書A群	**77.2**	**75.8**	**69.6**	**86.8**	**77.0**
		読B群	**52.1**	**77.6**	**9.6**	**60.5**	書B群	**47.3**	**39.9**	**39.9**	**64.2**	**44.3**
		読C群	**17.9**	**33.6**	**2.3**	**1.9**	書C群	**15.3**	**3.7**	**19.2**	**28.0**	**7.7**

(表５～７共に)
※平均得点率＝全生徒分（674名）
※読A群・読B群・読C群＝「読む」領域での得点率がそれぞれ「70%以上の生徒分（199名）」・「30%以上70%未満の生徒分（368名）」・「30%未満の生徒分（107名）」の平均得点率
※書A群・書B群・書C群＝「書く」領域での得点率がそれぞれ「70%以上の生徒分（62 名）」・「30%以上 70%未満の生徒分（345 名）」・「30%未満の生徒分（267 名）」の平均得点率

表６　「読む」領域の平均得点率（小問別）

	1問１	1問２	2問１	2問２	3問１
平均得点率	**87.9**	**51.6**	**34.7**	**18.5**	**59.2**
読A群	**99.2**	**86.9**	**84.9**	**50.4**	**87.6**
読B群	**94.4**	**44.0**	**16.0**	**6.4**	**60.5**
読C群	**44.4**	**12.1**	**5.6**	**0.7**	**1.9**

表７　「書く」領域の平均得点率（項目別）

	3問２ 内容	3問２ つづり・文法	4	5 意欲	5 内容	5 つづり・文法	6 内容	6 つづり・文法
平均得点率	**36.2**	**21.4**	**34.4**	**66.2**	**47.8**	**38.4**	**36.9**	**28.8**
書A群	**85.1**	**66.5**	**69.6**	**97.2**	**79.4**	**82.8**	**84.4**	**69.6**
書B群	**51.7**	**28.0**	**39.9**	**81.4**	**59.9**	**47.1**	**49.9**	**38.8**
書C群	**4.8**	**2.5**	**19.2**	**39.4**	**24.8**	**17.0**	**9.1**	**6.4**

相関係数は，合計得点（調査全体）と「読むこと」「書くこと」の領域別の合計得点，各大問別（大問3は小問別）の得点との相関を表している。相関係数とは，２つの得点の間に相関関係がどの程度認められるかを示す数値で，ここではピアソンの偏差積率相関係数を採用した。一般に，相関係数が0.40以上の場合，２つの得点の間に相関があり，0.70以上の場合，相関が非常に高いとされる。調査の結果，調査全体と各大問の相関が非常に高いことが分かった（表５）。また，調査全体，「読むこと」の領域，「書くこと」の領域の相互間には非常に高い相関が見られた。さらに，「読むこと」の領域と同領域の小問，「書くこと」の領域と同領域の小問・項目の間にも高い相関関係が認められ，α係数は0.85であった。したがって，本調査票は，英語の「読むこと」「書くこと」におけるコミュニケーション能力を測定するのに適した問題であると言える。

イ　調査全体の分析と考察

「読むこと」の領域では，伝言や手紙などから書き手の意向を理解し，適切に応じたり，対話文のあらすじや大切な部分を読み取ることは全体的にできている（表６－1，3）。その要因の一つとして，手紙や対話形式の英文には慣れていることが考えられる。これは，最近の中学校における英語教育がコミュニケーション能力の育成に重点を置いてきた成果であると言ってよい。このねらいは今回改訂された学習指導要領でも継続され，平成14年度から使用される教科書にも対話文や会話形式の題材が多数構成されている。その一方で，物語のあらすじや大切な部分を読み取る力が身に付くまでには至っていない（表６－2）。前述した最近の傾向により，物語や説明文等を読ませる活動が減り，生徒が文章の内容を把握することに慣れていないことも考えられる。しかし，情報化，国際化が進む社会の中で，インターネットのWebページ等で様々な情報を収集する必要性が高まり，その内容を把握したり，要点をつかむ力を身に付けさせることはますます重要になる。したがって，物語文のような，ある程度の長さをもつ文章で，登場人物や話の展開，大まかな流れをつかみながら，書き手の伝えようとする内容を読み取る力を身に付けさせることが必要である。

「書くこと」の領域では，自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書くことは比較的できている（表７－5）ものの，全般的に十分な力が身に付いているとは言えない。大問3の結果からは，英文の内容を日本語ではまとめられても，それを英語で表現できていないこともうかがえる。これは，「書くこと」におけるコミュニケーション能力が，自己紹介や趣味や興味など，自分自身に関することを自由に書く段階にとどまっており，物事や他人のことに関する情報について，その内容を正し

く把握し，要点を簡潔に表現するまでには至っていないと言えよう。

また，評価に関しては，分析的評価法を取り入れることにより，英文を正しくは書けないものの，内容が理解できたり，書こうとする意欲がある生徒を評価できた（表７）。この評価を生徒に還元することで，生徒は自分の力をより正確に判断でき，段階的な評価を知らせることで次の学習への動機付けにもなるであろう。

ウ　大問別の分析と考察

(ｱ)　大問1について

大問1は，学習指導要領の「読むことの言語活動」の「伝言や手紙などから書き手の意向を理解し，適切に応じること」という指導項目に基づき作成した。

115語から成る英文だが，問１では得点率が非常に高い（表６）。現在時制の文のみで構成され，言語材料が比較的易しかったためだと思われる。英文が長くても，難易度の高い言語材料を使わない限り，理解度は高くなると考えられる。問２では，どの空欄にも／take／の誤答が目立つ。／take／の用い方が多様なために混同するなど，よく理解できていない。また，「忙しい」という意味で／no free／と表現したり，3:00との関連で／time／を選択するなど，内容はとらえているが，その語の品詞（動詞，名詞，形容詞）が分からず，また，各品詞の用い方が十分に理解されていない。さらに，／no／の後に名詞／money, time／以外を選択した生徒が全体の約４割，／will／の後に動詞／meet, take／以外を選択した生徒が約３割いる。

(ｲ)　大問2について

大問2は，学習指導要領の「読むことの言語活動」の「物語や説明文などのあらすじや大切な部分を読み取ること」という指導項目に基づき作成した。

「読Ｃ群」に加え，「読Ｂ群」の得点率の低さも目立つ（表５）。大問1がすべて現在形の文であるのに対し，この英文には，使用されている言語材料の難易度も高かったことに加え，不規則動詞を含む過去表現や未来表現もあり，内容がつかめなかった生徒が多かったようだ。問２は，日本語で解答する問であるにもかかわらず，全小問・項目別平均得点率の中で最も低い(表６)。全体の44%が無答であり，無答者の割合でも全小問・項目別で最高である。感情を表す語／surprised／は，教科書では３年間で１～２回しか目にしない単語であるために，その意味が分からずに無答となったことが考えられる。また，英文の内容をとらえることができなかったことも誤答から推察できる。

(ｳ)　大問3について

大問3の問１は，学習指導要領の「読むことの言語活動」の「物語や説明文などのあらすじや大切な部分を読み取ること」，また，大問3の問２は，学習指導要領の「書くことの言語活動」の「聞いたり，読んだりしたことについてメモをとったり，感想や意見などを書いたりすること」という指導項目に基づき作成した。

大問3では，読む力と書く力を別々に見るために小問を２問とし，読む力と書く力の関係も分析した。また，自分の考えを自由に書くというより，対話文の要点をつかみメモを取るという条件の決まった文を書かせることで，書く力の基礎を見ることにした（表２）。

問１については，約65%の生徒が用件をほぼ正確に読み取っている一方で，約30%の生徒が全く読み取れておらず（図５），「読Ｃ群」の生徒で得点できたものはほとんどいない（表５）。本文中の明の台詞３行（11～13行目，p15参照）がとらえられた生徒とそうでない生徒で二極化されている。「読Ｃ群」の生徒に対

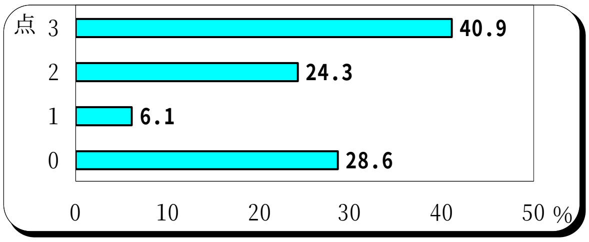


図５　大問3－問１

する，要点を正確に読み取る指導の工夫が必要である。問２の平均得点率は，従来の採点法（「つづり・文法」のみの採点）で約21%，「内容」のみの採点でも約36%と，それほど高くない（表７）。読んだことについてメモを取ったり，感想や意見などを書いたりするタイプの問題に慣れていないという側面も影響しているとみられ，今後指導すべき項目の一つと思われる。特に，問１が満点の生徒の４人に１人が問１で正確に答えた内容を英文で書けていないことが分かった。対話文の中から適切な文を抜き出し，主語を入れ替えるだけでできるのだが，そのような簡単な英文も書けない事実は，今後改善すべき課題であると言える。このように，メモを英文で書かせる指導は「読めるのに書けない生徒」の書く力を養成する第一歩となりうるであろう。

(ｴ) 大問4について

大問4は，学習指導要領の「書くことの言語活動」の「文字や符号を識別し，語と語の区切りなどに注意をして正しく書くこと」という指導項目に基づき作成した。空欄に入る語は，現行の学習指導要領に示してある必修語から基本的な語を選んだ。また，空欄には各語の最初の１文字をヒントとして示した（資料，p77参照）。

表８　大問4　（単位：%）

	平均得点率	無答率
①	10.7	**25.5**
②	**69.4**	19.4
③	15.0	**32.8**
④	18.0	**27.2**
⑤	12.8	**25.8**
⑥	**80.7**	9.1

６語のうち，②と⑥の平均得点率がそれぞれ約70%，約80%と高いが，他はそれらに比べて極端に低く，それぞれに無答が約２～３割いる（表８）。また，誤答の中には／future, sky, fly／など，指定された文字で始まる語を単に本文中から選んだ傾向もある。これは，②，⑥が，これまで頻繁に学習してきた慣用的な表現であるのに対し，他は頻出度がそれほど高くないことに加え，英語の文章の組み立てや英文の構造についての理解が不十分であることも起因していると考えられる。

(ｵ) 大問5について（中・高共通問題）

大問5は，学習指導要領の「書くことの言語活動」の「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書くこと」という指導項目に基づき作成した。各季節での行事など，主な語句を参考資料として与え，書く意欲を喚起した（資料，p77 参照）。

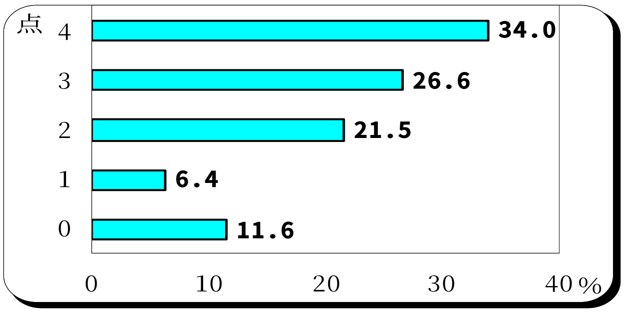


図６　大問5「意欲」

採点については，従来から行われてきたつづり・文法の視点からの採点に加え，内容理解や意欲の視点からも採点する分析的評価法を取り入れた。その結果，34%の生徒が「意欲」で満点を取った（図６）。「つづり・文法」や「内容」では評価できなくても，何とか英文を書こうとした生徒がいることが分かる。中学生では，完全な英文を作ることが難しく，単語や語句を使って表現しようとしていると思われる。

また，理由を述べるときには／because／を用いるのが一般的であり，調査の対象とした第２学年でその用法等を学習したばかりであるが，３人に１人しかこれを用いておらず，つづりや文法の間違いがなく，正しく用いている生徒は５人に１人に過ぎない。しかし，大問6の無答者（33%）のうち，大問5は「意欲」で得点している生徒が23%いる。このことから，生徒は，架空の場面設定より自分自身のことについての方が，より意欲的に表現しようとすると言えよう。

次に，高等学校の調査結果と比較してみた。表３に示す採点基準表に従い，中学校及び高等学校の研究委員でそれぞれの校種の生徒の採点を行った。

項目別の平均得点率は表９に示すように，すべての項目につき９％程度高等学校が高い。

表９　大問５項目別平均得点率　（単位：％）

	中学校	高等学校	高等学校との差
意　欲	**66.2**	**75.0**	**8.8**
内　容	**47.8**	**57.5**	**9.7**
つづり・文法	**38.4**	**46.7**	**8.3**

「意欲」については中学校及び高等学校とも高い得点率を示しており（表９），知っている単語や語句を並べて相手に自分の気持ちや考えを伝えようとしていることが分かる。「つづり・文法」が０点でも「意欲」が４点の生徒が中学校で約３％，高等学校で約４％程度いる（図７）ことからも，相手に考えを何とかして伝えたいと考えているようである。しかしながら，前述したように参考資料を与えたことが「単語一語であっても表現することはできた」ことにつながったことは否めないが，それでも単語一つも表現しなかった生徒が高等学校にもいる。その中には，英文を正確に表現しなければいけないことに執着しすぎて結果的に無答になった生徒も含まれていると思われる。そのような思いが「自分の考えていることを英語で書く」ことを好む生徒が少ない（表４）という実態を反映しているようである。仮にうまく又は適切に表現できなくても，「単語一つでもよいから積極的に表現することからコミュニケーション活動が始まる」ことを，むしろ中学校の段階でしっかり理解，定着させなければならない。

また，**「内容」については**，「つづり・文法」が２点以上で「内容」が４点の生徒が中学校で7.7%，高等学校で12.3%おり（図７），高校生の方が／because／を用いて理由まできちんと述べる，比較表現を用いて好きな季節と嫌いな季節を対比する，毎年その季節に行うことを紹介するなどの書く材料を多くもっていることが分かる。中学校は，得点率でも50%に満たない（表９）ので，単なる／I like ～.／の羅列にとどまらず，自分の体験等を通しての気持ちや考えを，これまでに学習した言語材料を用いて表現させる指導が必要であろう。

しかし，「つづり・文法」で中学校で約66%，高等学校でも約54%の生徒が１点以下であり（図７），つづりや文法のミスがない完全な英文を書けない生徒が多いことが分かる。表現しようとする英文が長いほど，あるいは複雑になるほどミスが生じる確率は大きくなろうが，高等学校の解答例には比較的平易な文型を用いて解答する傾向が見られた。高等学校で学習する分詞構文，関係代名詞の非制限用法，仮定法等を用いて表現することに自信をもたせる上でも，基本的な文や文型等の文法事項を十分理解させ，それらを用いて表現できるようにする指導が中学校で求められる。そのためにも，自分が表現した文のどこにつづりや文法の間違いがあるのかを確実に把握させ，drillやpattern practice等を通して，表現力の向上につなげさせる指導を改めて重視していく必要がある。

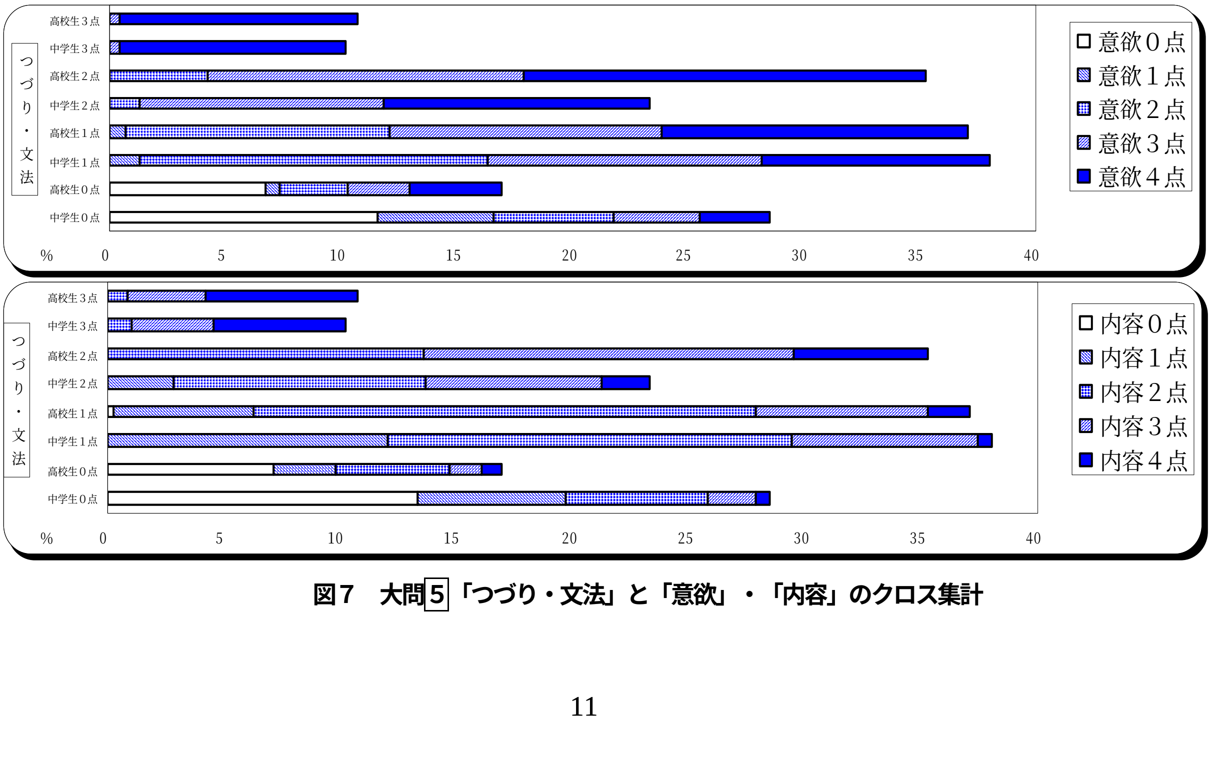


図７　大問５「つづり・文法」と「意欲」・「内容」のクロス集計

(カ) 大問6について

大問6は，学習指導要領の「書くことの言語活動」の「伝言や手紙などで読み手に自分の意向が正しく伝わるように書くこと」という指導項目に基づき作成した。

「つづり・文法」で採点した結果，無答者が約33%おり，「書くこと」の領域の項目別では平均得点率が最も低い（表７）。「内容」の評価でも，得点傾向は変わらず，「書きたいが書けない生徒」が多い。その理由として，極端に言えば，／Sushi Party, March Fourth, Afternoon 5／と表現しても得点できたのだが，それでも得点できないという単語レベルでの書く力の低さと，招待状を英語で書くという経験の少なさが考えられる。大問5では自己表現させるための言語材料を提供したが，6では日本語のメモだけを手掛かりに英文を作成させた（資料，p77参照）。これまでの指導では，生徒の意欲を喚起するために，架空の場面設定よりも自分自身のことについて書かせることが多かったため，現時点ではこのようなタスクに対応できる程度の英語力を十分には身に付けていない生徒がほとんどである。自己表現のみならず，生活の中での実践的な場面を多く設定し，その場面での表現に慣れさせる必要がある。

6 研究のまとめ

(1) 語彙を増やすための指導の工夫

今回の調査結果では，語彙力が不足していたために正解が導き出せなかった傾向が全体的に見られた。教科書の中での取扱い回数が相対的に多い語句や，授業の中で行う言語活動において，よく用いる語句は定着しているが，そうでない語句は，たとえそれが基本的な語であっても，定着度は低いようである。そこで，特に中学校で習得させたい900語程度については，様々な言語活動の中で，できるだけ頻繁に用い，生徒がそれらを目にする機会や活用する機会を増やしてやることが大切である。例えば，「読A群」の生徒でさえも得点率が低かった大問2の／surprised／については，教科書の本文中の語として取り扱うことにとどまらず，この語を「感情を表す言葉の仲間」として／sad, glad, happy, shocked／等とともに示し，pattern practiceをさせたり，手紙や日記を書かせたりする活動に取り入れたり，「つづりが難しい語の仲間」として／beautiful, difficult, written／等とともに示して，小テストを繰り返す等の工夫が考えられる。このように，同じ語を複数の機会に学習させることが効果的であろう。同時に，複数の単語をグループ（仲間）化してとらえたり，整理することは，語彙を増やす上で効果的な手段でもある。特に，上に示した「感情を表す言葉の仲間」のように，同じ品詞でグループを構成すれば，次に述べる「英文の大まかな構造を理解させる」際にも役立つであろう。

また，やや発展的な学習ではあるが，／make friends with／，／come back／等の連語と同じように，２語以上の単語を組み合わせて習得させる方法も，語彙を増やす上では同様に効果的であると考える。例えば，／breakfast／や／want／，／picture／を単なる単語として提示するよりも／have breakfast／，／want a CD, want to swim／，／take a picture／等のように一般的な表現を用いて示せば，その語の品詞としての役割も同時に習得することにつながるだろう。そのほかにも，／look, see, watch／のような同意語を／look at me, see many flowers, watch TV／などと提示する方法等も考えられる。

(2) 英文の大まかな構造を理解させるための指導の工夫

今回の調査で，「用いるべき語彙が分かっていても，完全な英文を作ることができない」という実態が明らかになった。正しい英文で表現させるためには，文型や慣用的な表現など，英文の大まかな構造についての理解を徹底する必要があると考える。文型を新たに導入する際には，主語や動詞，目的語等を入れ替えてのpattern practiceや，interview game等でのpair practiceが従来から行われてきた。これら自体は効果的な指導方法であるが，大切なことはその指導を新出時だけでなく，継続的に繰り返すことであると考える。一度や二度取り扱うだけでは「書C群」だけでなく，「書B群」の生徒もその文型を十分に理

解することが困難であろう。英文の大まかな構造についても語彙の指導同様，同じことを学習する機会を増やすことが大切である。

また，文法事項については，例えば，「／no／の後には名詞がくる」「／be／の後には形容詞か名詞がくる」「／will／の後には動詞がくる」等のように，最初から文法用語を用いて説明したり，実際の文から切り離して覚えさせるのではなく，pattern practiceを徹底して，文として表現させることを繰り返し，生徒にそれぞれの用い方を気付かせたり，慣れさせたりすることを経て，まとめる段階で文法用語等を用いて整理させる手立てをとる必要がある。

(3) 実践的なタスク活動の多用

今回の調査で取り扱った「手紙の返事を書く」ことや「相手の用件を第三者に伝言メモで伝える」「招待状を書く」ことなどは，まさに生徒が将来遭遇すると思われる場面であるのだが，このようなタスクに慣れていないことが浮き彫りになった。学習指導要領には，「言語活動の取扱い」が今回新たに設けられ，その中に「言語の使用場面の例」が具体的に示されている。これらの例を参考に，そのような実践的な場面を教室で設定する必要がある。中でも，コンピュータの普及により，各学校に設置された情報機器を活用した授業づくりが要求される。「検索で入手した資料を教材として活用する」，「外国人とE-mailを交換する」，「E-mailで相手と情報交換をした内容を学級で紹介し合う」等の活動を取り入れていく必要がある。

(4) 指導上留意すべきこと

以上の３点を指導するに当たり，留意すべき点を２つ考えてみたい。まず，**生徒一人一人の習熟度に応じた指導を心掛けること**である。これまで多用されてきた一斉形式の授業形態では十分な理解力や表現力が身に付きにくかった生徒への手立てが必要である。例えば，大問3のようなタスク（資料，p76）で，書かれている英文の要点が的確につかめなかった**「読C群」**の生徒には，「対話の前半部分（10行目まで）の内容を確認させる」「要点となる箇所（11～12行目）に線を引かせる」「要点の内容を確認する」「伝言メモでは明のことをどう表現するのかを考えさせる」など，最終的なタスクを行うまでの手立てを段階的に指示することが有効であろう。また，選択教科等の時間を有効に生かし，補充的な学習，例えば，１年次の教科書を用いて，「どこでつまずき始めたのか」を生徒と教師がお互いに確認したり，１対１でのrepeatingやpattern practiceを徹底する等を個別に取り入れる必要がある。**「読B群」**に対しては，同群どうしでのペア活動等のグループ活動も有効であると考える。例えば，同群の生徒は，大問2でキーワードとなる／surprised／を含め，本文３行目の／I'll find it easily.／以降の内容（資料，p76参照）をとらえていない傾向にあるが，グループ活動で知識を出し合えば，本文の内容をより明確にとらえたり，／surprised／の意味を推察することは大いに期待できる。さらに，**「読A群」**の生徒には，本文の内容を数十字程度の日本語に要約するタスクを追加したり，物語の続きを日本文や英文でつくらせるなどの発展的な学習も可能であろう。

「読C群」の生徒と同様に，**「書C群」**の生徒にも，最終的なタスクを行うまでの段階的な手立て取ることが有効であろう。大問6のようなタスク（資料，p77参照）で，「条件に合う日本文をつくらせる」「その日本文を英文で表現するために必要な単語を書き出させる」「書き出せなかった箇所を別の簡単な日本語の表現に置き換えたり，文を二つに分けたりして，再度英単語を書き出させる」「単語を並べ，文にさせる」などの活動に，教師がヒントを与えながら取り組ませることなどが考えられる。これらの活動は**「書B群」**の生徒にも有効と思われるが，**「書C群」**の生徒には教師の援助が適宜必要であるのに対し，**「書B群」**の生徒には，辞書を活用させたり，同群どうしのペア活動の形態を取るなどして，できるだけ自力でのタスク達成を目標とさせたい。また，習熟度の高い**「書A群」**の生徒については，一人一人の興味や関心の高い分野の事柄についてインターネットや雑誌で収集した情報やそれに対する意見や考えを英語で表現させたり，実際に外国人とのE-mailの交換継続させる活動等の発展的な学習を促進したい。

２点目は，**生徒の意欲を段階的に評価すること**である。「読んだ内容の要点を伝言メモとして英文で書けた」「招待状が作成できた」等の最終段階の評価も大切であるが，そこに到達するまでの過程，例えば，「書くべき内容を日本語ではとらえることができた」「英文にはできなくても，必要な単語は書けた」等を評価することにより，生徒一人一人が，途中で落胆することなく，徐々に表現力を高めていくことができるだろう。今回は１回限りの調査だったために，「書くこと」の領域の一部にのみ「分析的評価法」を採用して，「意欲」も評価したが，日々の授業を通して「読むこと」の領域でもそれを評価することは可能である。実践的コミュニケーション能力が少しずつ身に付いてきていることを教師だけでなく生徒自身も把握することは，学習を継続していく上で重要なことであろう。

《研究委員》

吉原　雅博　佐賀県教育センター研修員　平成13年度
椛島陽一郎　武雄市立武雄中学校教諭　平成12～13年度（平成12年度佐賀県教育センター研修員）
大・日左恵　諸富町立諸富中学校教諭　平成12～13年度
牟田　禎一　三田川町立三田川中学校教諭　平成12～13年度
森田千鶴子　塩田町立塩田中学校教諭　平成12年度

《引用文献》

(1) 望月　昭彦他　『英語コミュニケーション能力の評価測定ー個別・総合テスト，分析的・総合評価についてー』（平成８年度～平成10年度科学研究費研究成果報告書）1999年　筑波大学　p34，pp35-38

(2) 望月　昭彦　「コミュニカティブ・テストの特色とWeirの『３部構成枠組』」『英語教育』2000年４月号　大修館書店　p45

《参考文献》

・ 大下　邦幸編著　『コミュニケーション能力を高める英語授業』1996年　東京書籍
・ 佐野　正之　「自ら学び自ら考える力を育てる外国語の指導」『中等教育資料』1999年10月号　大日本図書
・ 文部省　『中学校学習指導要領』1998年　大蔵省印刷局
・ 文部省　『中学校学習指導要領解説ー外国語編ー』1999年　東京書籍
・ 文部省　『高等学校学習指導要領解説　外国語編　英語編』1999年　開隆堂
・ Ｊ.Ｂ.ヒートン　（語学教育研究所テスト研究グループ訳）　『コミュニカティブ・テスティング』1992年　研究社
・ Ｊ.Ｄ.ブラウン　（和田　稔訳）　『言語テストの基礎知識』1999年　大修館書店
・ Bachman, H.　What does language testing have to offer?, *TESOL Quarterly*　Vol.25，1991年
・ Brown, H.　*Principles of language learning and teaching.*　1994年 New Jersey: Prentice Hall
・ Canale, M.　From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy, *Language and Communication*　edited by J. Richards & R. Schmidt. 1983年 London: Longman.
・ Hymes, D.　On communicative competence, *Sociolinguistics*　edited by J. Pride & J. Holmes. 1972年 Harmondsworth: Penguin
・ Savingnon, J.　*Communicative Competence: Theory and Classroom Practice: Texts and Contexts in Second Language Learning.*　1983年Massachusetts: Addison-Wesley
・ Weir, C.　*Understanding & Developing Language Tests.*　1993年 Hertfordshire: Prentice Hall

英語コミュニケーション能力に関する調査票

（注　　意）

1　「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。

2　答えは、すべて解答用紙に書きなさい。

3　調査時間は５０分です。下は調査時間の目安です。先生の指示に従って解答しなさい。

　問題　1及び2　……　１５分

　問題　3及び4　……　１５分

　問題　5及び6　……　２０分

4　英語は、活字体、筆記体のどちらで書いてもかまいません。

1　次は、ひろ子(Hiroko)がホームステイをさせてもらうことになったスミス氏(Mr. Smith)にあてた２回目の手紙です。手紙を読んで、あとの問いに答えなさい。

June 29, 2000

Dear Mr. Smith,

Thank you for your letter.

I'm going to *introduce my family in this letter.　There are four people in my family; my father, mother, brother and me.　My father works at a library.　He likes fishing.　My mother has short hair.　She is a music teacher at my school.　She likes listening to music.　My brother is a high school student.　He can play the guitar very well.　He is the tallest in my family.　I want to see your family soon.

I'm going to arrive at 3:00 p.m. on July 23.　<u>Can you come to the *airport to see me?</u>　Please write soon.

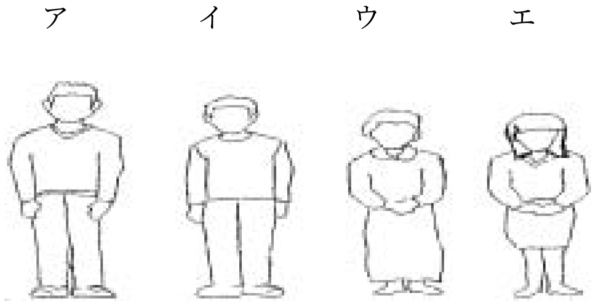
Your new daughter,

Hiroko Noda

*introduce　紹介する　　*airport　空港

問１　下の表は、ひろ子の家族についてまとめたものです。手紙と下の絵を参考にし、①～⑥に簡潔な日本語及び絵の記号を記入して表を完成させなさい。

人　物	職　業	趣味･特技	絵の記号
父	図書館勤務	②	④
母	①	音楽鑑賞	⑤
兄	高校生	③	⑥



問２　(A)は、スミス氏(Mr. Smith)のスケジュールです。下線部のひろ子の質問に(B)のように答えるとします。(B)の①～③の空欄に、下のア～カから最も適当なものを一つずつ選び、記号で答えなさい。

(A)

	morning	afternoon
July 23	work	free time

(B)

I have no (①) in the morning, but I will be (②) in the afternoon.　I will (③) you at 3:30 at the airport.

ア free　　イ meet　　ウ money　　エ old　　オ take　　カ time

2 次のジョン（John）についての英文を読んで、あとの問いに答えなさい。

John worked in an *office in a small town. One day his *boss said to him, "John, will you go to an office in London ? Here's the *address."

John went to London by train. "The office is near the *station. I'll find it *easily."

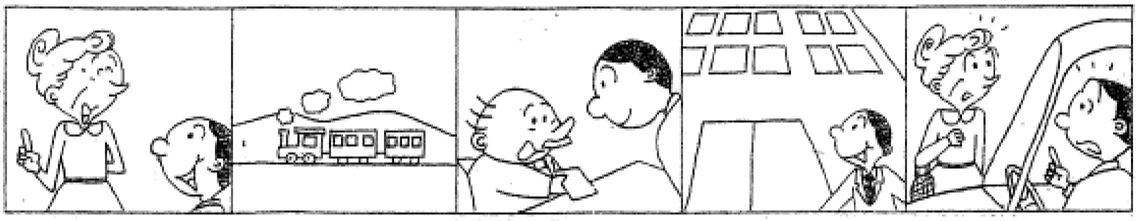
But after an hour he was still *looking for the office, so he stopped and asked an old woman. She said, "Walk along this street, and it's in the red building. You'll find it on your left." John went and arrived at the office.

A few days later he went to the same city by car, but again he did not find the office, so he asked someone the way. It was the same old woman! <u>She was very surprised</u> and said, "Are you still looking for your office?"

*office 事務所 *boss ボス（上役） *address 住所
*station 駅 *easily 簡単に *look for さがす

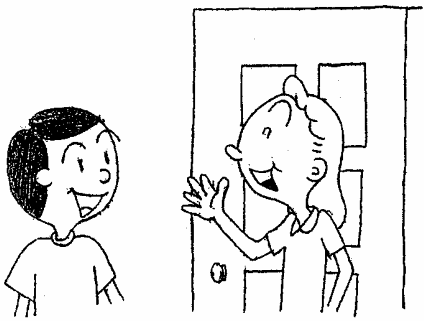
問１ 話の流れに合うように、ウから始めて他の絵を並べかえなさい。

ア イ ウ エ オ



問２ 彼女が下線部 <u>She was very surprised</u> のような気持ちになったのはなぜでしょう。その理由を日本語で書きなさい。

3 次の明(Akira)とホワイトさん(Mrs. White)の対話文を読んで、あとの問いに答えなさい。



Akira : Good morning, Mrs. White.
Mrs. White :Oh, hi, Akira.
Akira : Is Mike home now?
Mrs. White : I’m sorry, but he isn’t home.
He is at his uncle’s house.
He went there yesterday.
Akira : When will he come back?
Mrs. White : This afternoon.
Akira : Will you give him my *message?
Mrs. White : Sure.
Akira : I got three tickets for the soccer game tomorrow.
I want to go to the game with Mike.
Kenji is going, too.
Mrs. White : O.K. I’ll tell him. He will *call you this evening.
Akira : Thank you.
Mrs. White : Thank you for coming. Good-bye.

*message 伝言 *call 電話をする

問１ 明の用件は何でしたか。要点をまとめて日本語で答えなさい。

問２ ホワイトさんは午後から急な用事が入ったために、息子のマイク(Mike)に直接伝えることができなくなりました。そこで、ホワイトさんになったつもりで、次のマイクへの伝言メモを４文で完成させなさい。

To Mike

Akira visited you this morning.
① He
②
③
④

From Mother

4　次は、けい子のスピーチ原稿です。文章の意味が通じるように、①〜⑥の（　　）にあてはまる英語１語をそれぞれ書きなさい。ただし、（　　）内に示された文字で書き始めること。

About My Future

Hello, everyone.

Today I want to ①(t　　　　) you about my future.

I want to be a *pilot.　Do you ②(k　　　　) why?

③(F　　　　), I want to see the blue *sky over the *cloud.　Last summer I ④(s　　　　) a beautiful blue *sky from a plane.　I cannot forget that.

Second, I want to make ⑤(f　　　　) with many people in the world. Planes fly to many places, and I can meet many people in every country.

⑥(T　　　　) you.

*pilot　パイロット　　*sky　空　　*cloud　雲

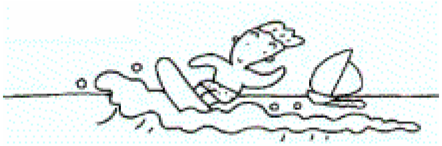
5　授業で、ALT からあなたの好きな季節を尋ねられたとします。あなたの一番好きな季節（season）を選び、その季節と好きな理由を３文以上の英文で書きなさい。下の資料を参考にしてもかまいません。

◎　**資料**

春(spring)

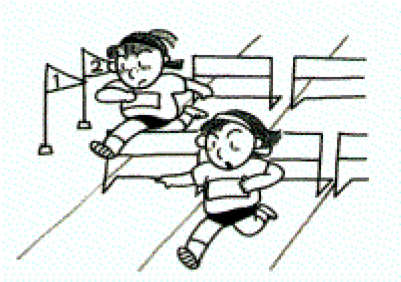
- ○　卒業式……a graduation ceremony
- ○　入学式……an entrance ceremony
- ○　始業式……an opening ceremony
- ○　春休み……spring vacation
- ○　ゴールデンウイーク……golden week
- ○　中間テスト……midterm exams

夏(summer)



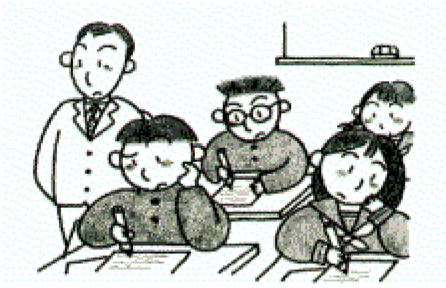
- ○　夏休み……summer vacation
- ○　中体連（高校総体）……a sport tournament
- ○　期末テスト……end-of-term exams
- ○　キャンプ……camp
- ○　花火大会……a fire work display
- ○　盆おどり……a Bon Festival dance

秋(fall)



- ○　体育大会……a school sports day
- ○　文化祭……a school festival
- ○　遠足………a school outing
- ○　修学旅行……a school trip
- ○　登山……mountain climbing

冬(winter)



- ○　冬休み……winter vacation
- ○　クリスマス……Christmas
- ○　元日……New Year’s Day
- ○　スキーをする……ski

6　ゆみ子(Yumiko)が、日本にいる友達のジム(Jim)に、すしパーティー(Sushi Party)の招待状(Invitation)を書くことになりました。ゆみ子になったつもりで、下のメモに書いてある内容が正しく伝わるように注意しながら、英文で招待状を完成させなさい。英文はいくつ書いてもかまいません。

メモ

Sushi Party

○　3月4日　午後5時～

○　私の家

○　友達と一緒に来てもよい

Invitation

Dear Jim,

____

____

____

____

From Yumiko

英語に関するアンケート調査

佐賀県教育センター

組		出席番号	

皆さんへのお願い

○英語の調査への御協力、ありがとうございました。調査の分析の資料として利用させてもらいますので、下のアンケートに回答してください。

○このアンケート調査は、あなたの学校の成績には、全く関係ありません。あなたの名前がでることもありませんので、自分の思ったとおりに、正直に答えてください。

○自分の考えに最も近いものを選んで答えてください。

1　英語の調査は、全部で６問ありましたが、最もやさしいと思った問題は何番ですか。一つ選び、○で囲んでください。

①　１番　②　２番　③　３番　④　４番　⑤　５番　⑥　６番

2　英語の調査は、全部で６問ありましたが、最もむずかしいと思った問題は何番ですか。一つ選び、○で囲んでください。

①　１番　②　２番　③　３番　④　４番　⑤　５番　⑥　６番

これからあとは、皆さんが英語について日ごろから思っていることについて質問します。

3　あなたは、英語が好きですか。

①　とても好き　②　まあまあ好き　③　あまり好きではない　④　全く好きではない

4　あなたは、英語が得意ですか。

①　とても得意　②　まあまあ得意　③　あまり得意ではない　④　全く得意ではない

5　英語の授業では、どのような活動が好きですか。あてはまるものすべてに○を付けてください。

①　単語を先生やCD(テープ)の後について読む
②　教科書を声を出して読む
③　先生（ALTも含む）の英語での話を聞く
④　先生と英語でコミュニケーションをする
⑤　身近な内容について友達と英語で話す
⑥　友達との英語でのインタビューゲーム
⑦　自分の考えている内容を英語で書く
⑧　教科書の本文の内容理解
⑨　教科書以外の英文の内容を読み取る
⑩　その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

6　あなたは、特に英語のどのような力を身に付けたいですか。一つ選び○で囲んでください。

①　話される英語を聞いて理解する力
②　自分の考えや気持ちを話して相手に伝える力
③　書かれている英文の内容を読み取る力
④　自分の考えや気持ちを書いて相手に伝える力
⑤　その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）